

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
11C	12-139	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
Alcohol-attributable cancer deaths and years of potential life lost in the United States. 米国における飲酒起因癌と損失残余年数		
執筆者		
Nelson DE, Jarman DW, Rehm J, et al.		
掲載誌		
Am J Public Health. 2013 Apr;103(4):641-8.		
キーワード		
飲酒起因癌死亡、損失残余年数、人口寄与危険度、飲酒量		
要旨		
目的： 現在の米国における飲酒起因癌死亡と損失残余年数を求めること。		
方法： 我々は2つの方法を用いて人口寄与危険度を求めた。相対危険度を2000年以降に出版されたメタ解析の結果をもとに計算し、成人飲酒量を2009年疫学データシステム、2009年行動とリスクファクターの調査結果、および2009-2010年米国アルコール調査結果から求めた。		
結果： 飲酒起因の癌死は18,200~21,300あったと想定され、米国の全癌死亡の3.2%~3.7%に相当する。女性での飲酒起因癌のほとんどは乳癌で(56%~66%)、男性では上気道と食道癌が多数あった(53%~71%)。飲酒起因癌はそれぞれの死に17.0~19.1年の損失残余年数があったと推定された。毎日20g(1.5飲酒単位)までの飲酒が飲酒起因癌の26%~35%を占めた。		
結論： 飲酒は現在もなお癌死と損失残余年数に大きく寄与している。飲酒量が増えるとリスクが増加するが癌に対して安全閾値は存在しない。節酒は重要で過小強調されている癌予防施策である。		